扇に書く和歌

－『源氏物語』におけるその会話的機能をめぐって－

お茶の水女子大学大学院生
朴　英　美

日本の「扇」には「檜扇（ひおうぎ）」と「蝙蝠（かわほり）」の二種類が見られる。事典類の説明を見ると、これらの開閉式の扇は中国の団扇をもとに、平安初期に日本で考案されたものだという。
平安時代の扇は単に夏に風を起すためのものではない。『王朝語辞典』は「あふぎ（扇）」について「単なる銷夏の用を越え、装いの一部として己れの趣味好尚を競うものであった。またそこに描かれた絵や添えられた詩歌により、口には出さぬ何かを表現することもある。」と説明する。

『大鏡』「伊尹伝」には、藤原行成が表裏に漢詩を楷書・草書に書き分けて一条天皇に献上する派手な扇が描かれる。『うつほ物語』には扇の具体的な描写はないが、扇に和歌を「書きつける」場面が二例、「書く」場面が一例見られる。『枕草子』では、別れを惜しむ絵が描かれた扇に中宮定子自らが和歌を書き、日向に下向する乳母に贈った。また、『紫式部日記』では由緒ある詩歌の言葉を記した扇の趣向をめぐる女性たちの心理戦を見ることができる。

『源氏物語』では「扇」が三六例、「かはほり」が二例見られる。そのうちの「扇に和歌を書く」六例には、物語に果たす扇の特別な機能を見て取れる。最初の例である夕顔の「白い扇」について、大胆な歌とともに夕顔の筆跡が語られている（夕顔巻）。二例目の源典侍の赤い扇は歳には不釣り合いな派手なものと描写される一方で、その筆跡は風情があると語られる（紅葉賀巻）。三例目は朧月夜と別れ、自邸に帰った源氏が朧月夜の扇に歌を書く例である。朧月夜の扇の「桜の三重(みへ)がさね」の解釈については諸説あるが、いずれにせよその扇の様子が具体的に描かれている。源氏はその扇に朧月夜との恋の風情を詠む歌を書く（花宴巻）。四例目では葵祭で源氏を見つけた源典侍が自身の扇の一部分を折って歌を書いて源氏に送り、源氏は筆跡を見て源典侍からの歌と気付くという箇所である（葵巻）。五例目は源氏と、尼になった女三の宮との場面である。源氏が女三の宮の扇に歌を書きつけ、女三の宮は返歌を同じ扇に書く（鈴虫巻）。六例目は紫の上の一周忌の場面である。中将の君の扇に紫の上を懐かしむ歌が書かれており、源氏がそれに歌を書き添える（幻巻）。

以上のように『源氏物語』では、即興で扇に歌を書く例や、扇に書いた歌で応答が行われる場面など、扇をめぐる様々な描写が登場する。また、あえて当時貴重品とされた扇に和歌を書くことの意味についても追求する価値があるだろう。日本では、固有の形が考案された早い時期から扇が芸術的なものへと発展を遂げており、それが文学の表現手段のひとつとしても導入されたものと考えられる。